HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	神経発達症の異年齢期交流に見られる関係性の研究 ： 旭川LD 親の会ぷりずむの登山キャンプの参与観察から
Author(s)	日高, 茂暢; 眞鍋, 優志; 小泉, 雅彦 他
Citation	子ども発達臨床研究, 13, 35-48
Issue Date	2019-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.13.35
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73667
Type	departmental bulletin paper
File Information	050-1882-1707-13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

神経発達症の異年齢期交流に見られる関係性の研究

── 旭川 LD 親の会ぷりずむの登山キャンプの参与観察から ──

日高　茂暢[1]・眞鍋　優志[2]・小泉　雅彦[3]・室橋　春光[4]

A study of cross-age communication between children and adolescences with neurodevelopmental disorders: participant observation about the climbing camp at Asahikawa LD parent's association PURIZUMU.

Motonobu HIDAKA, Masashi MANABE,
Masahiko KOIZUMI, Harumitsu MUROHASHI

要　旨

野外での療育活動の実践研究は、特定のスキル獲得が中心であり、子ども・青年の関係性に焦点をあてた検討は少ない。本研究の目的は、神経発達症のある子どもと青年の異年齢期交流が発達にもたらす影響を明らかにすることである。本研究では、親の会が企画する登山キャンプに参与観察し、キャンプ内で生じる参加者の異年齢期交流を調査した。登山キャンプでは、子どもと青年の間にナナメの関係性が生じやすいことが分かった。その結果、子どもにとっては近未来像として取り入れるロールモデルになること、青年にとっては支援者の行動を模倣し子どもに実践する養育性形成の場になることが考えられた。また登山キャンプは居場所として、集団精神療法のような心理的安定を促す要素があることが考えられた。神経発達症のある子どもや青年にとって、同年齢集団と比べ、異年齢集団の方が能力の差異を肯定的に承認されやすいと考えられた。

キーワード：神経発達症、LD 親の会、異年齢期交流、居場所、ナナメの関係性

はじめに

神経発達症（neurodevelopmental disorders）は知的障害や限局性学習症（Specific Learning Disorders；SLD、本論文では従来の LD と表記する）、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorders；ASD）、注意欠如多動症（Attention Deficit / Hyperactivity Disorders；ADHD）、発達

[1] 作新学院大学人間文化学部　准教授
[2] 北海道大学大学院教育学院　修士課程
[3] Gifted・LD センター、札幌学院大学心理臨床センター外部アドバイザー
[4] 札幌学院大学心理学部　教授、北海道大学　名誉教授

10.14943/rcccd.13.35

性協調運動症（Developmental Coordination Disorders；DCD）など、中枢神経系の非定型発達による発達障害をさす（American Psychiatric Association, 2014）。神経発達症をもつ子どもの保護者は、医療や教育、福祉などの専門家とつながり、子どもの発達支援に取り組んできた。同時に、同じ神経発達症をもつ子ども同士の仲間を作ったり、保護者同士で情報交換をしたりする目的で、親の会を結成している。保護者の情報交換に加え、親の会は同じような悩みをもつ保護者の共感や支持的交流など、情緒的サポート源として機能し、保護者の育児に関する自己効力感を高めている（半田，2017）。

日本における親の会の歴史は古い（保護者の動向について、詳細は通山，2011 を参照）。ASD の親の会では、1967 年に日本自閉症協会の前身である自閉症児親の会が設立され、80 年以降親の会主催による講演や研修会が行われた。LD の親の会は、1990 年を境に全国で組織され、1990 年には全国 LD 親の会の前身である全国学習障害児・者親の会連絡会が発足した。北海道では、1987 年に札幌で北海道学習障害児・者親の会クローバーが設立されたことを契機に、小樽（ぽてとの会）、函館（わんぱくクラブ）、室蘭（ダビンチの会）、旭川（ぷりずむ）など全道各地に広がっていった。

全国の親の会で企画されている活動として、登山やキャンプといった野外での療育活動がある。野外での療育活動は、北海道大学教育学部特殊教育講座の奥田三郎が知的障害のある子どもの保護者向けの翻訳書の中で紹介し（Dittmann, 1959, 奥田・木村訳，1964）、すぐに日本でも実践報告がされている（山下，1966）。1969 年から 1989 年まで朝日新聞西部厚生文化事業団が主催した朝日自閉症キャンプが開催されている。小林・村田（1977）は朝日自閉症キャンプを通じて ASD の子どもの生活面や集団生活面の変化について、療育的効果があると報告している。

野外の療育活動は、専門家と保護者が協力しながら各地で行われるようになり、実践研究として報告されてきた。例えば、朝日自閉症キャンプを参考に、福岡県志賀島でわかすぎ自閉症キャンプを開催した木谷（2001）の実践がある。木谷は、標的行動の獲得を目的とした構造化された治療が ASD のある子どもの自発性を損なう可能性を指摘する。ASD のある子どもに何かをさせることが目的でなく、キャンプ内で生じる情緒的交流が自然な形で ASD のある子どもの集団参加への動機づけを高めると考察している。また NPO 法人アスペ・エルデの会は、愛知県日間賀島でキャンプ（日間賀島合宿）を開催している。日間賀島合宿では、午前に自己理解（木谷，2014）や感情のコントロール（白石，2010；望月，2011）などの適応のためのスキル・トレーニングを行い、午後に海遊びなど余暇活動を通じた交流を行っている。アスペ・エルデの会は、日間賀島合宿について、スキルの獲得だけでなく、余暇活動の中で子ども同士の仲間関係の構築も意義が大きいとする。以上のように、神経発達症の子どもに対する野外での療育活動は、子どもの困難を克服する何らかのスキル獲得だけを主眼としておらず、同じプログラムに参加する同じ困難をもつ仲間との交流や情緒的な共有体験にも重点をおいていることが分かる。

神経発達症のある子どもや青年は、その発達特性から、コミュニケーションに関連した機能、他者や周囲から習得する機能、衝動抑制の機能のアンバランスが大きく、その子らしい発達様相を辿るため、集団との関わりが難しい場合が多い（田中，2013）。野外での療育活動に参加する人の人間関係に着目すると、野外での療育活動では、同じ目線に立った仲間との交流という横の関係性が生じていると考えられる。学校では「できる–できない」という能力の差分から子ども間で縦の関係性になりやすい神経発達症のある子どもが、野外での療育活動の場面では横の関係性を築きやすいという点は注目すべき点である。

また神経発達症のある青年は他者の関係性において孤立し精神的健康を損ないやすい傾向があるため、居場所の必要性が指摘される（日高，2013；木立ら，2015）。居場所とは、被受容感、安全、所

属意識、および居心地の良さを感じる心理的、物理的場所（Bamba & Haight, 2007）のことである。居場所の形態は、サロン的活動、余暇的活動、就労準備的活動など様々であるが、共通して他者との交流を通じて自己理解が促進される機能をもつ（柴田ら，2011）。神経発達症のある青年の居場所の１つとしてごぶサタ倶楽部の実践がある（ごぶサタ倶楽部の実践について、詳細は小泉ら，2013；渡辺・蒔苗・室橋，2017 を参照）。ごぶサタ倶楽部の実践を通じて、米内山（2012）は神経発達症のある子どもが思春期・青年期に入ることで大学生・大学院生という近い青年期の支援者は、子どもの生きにくさを共に考え、精神的自立を促す Big Brothers & Sisters（BBS）のような存在であると報告している。BBS とは、社会適応に悩む多くの少年少女に、同世代の兄や姉のような存在として、一緒に悩み、一緒に学び、一緒に楽しむボランティア活動を展開する地域活動である。米内山の報告は、児童期は先生と呼び、支援者という縦の関係性が明確であった関係性が、思春期・青年期になり発達段階の距離が近づくことで、人生の相談者のような、おじ-おいのような“斜めの関係（笠原，1977）”に関係性が発展したと考えることができる。あるいは笠原の斜めの関係よりも年齢差の少ない、中立的な異年齢間の友人関係である“ナナメの関係（枝廣，2013，2015）”というべき関係性に変化したと考えることができる。

さらに日高（2012）は、ごぶサタ倶楽部の中で、斜め・ナナメの関係の支援者が神経発達症のある青年にどのように関与しているか検討している。日高はごぶサタ倶楽部の居場所支援を神経発達症のある青年の自助グループとして捉え直し、支援者と相互承認し合う関係性や支援者―被支援者を越えた仲間意識、フリートークの中で生じるピア・カウンセリングの機能を見い出している（Figure 1）。一方、コミュニケーション・スキルや興味関心の低さから他者との会話の共有など情緒的交流の難しい青年は、居場所活動の中で、同じ物理空間に居つづけても、支援者と交流しやすく青年同士の交流は乏しくなる傾向があり、居場所内において関係性の断片化が生じやすい事も指摘した（Figure 2）。

日高は、ごぶサタ倶楽部の支援者は、青年同士の関係の断片化を解消するため、青年同士の交流を促し、青年同士が仲間意識をもつように、青年同士の中継地点（ハブ）として機能することを報

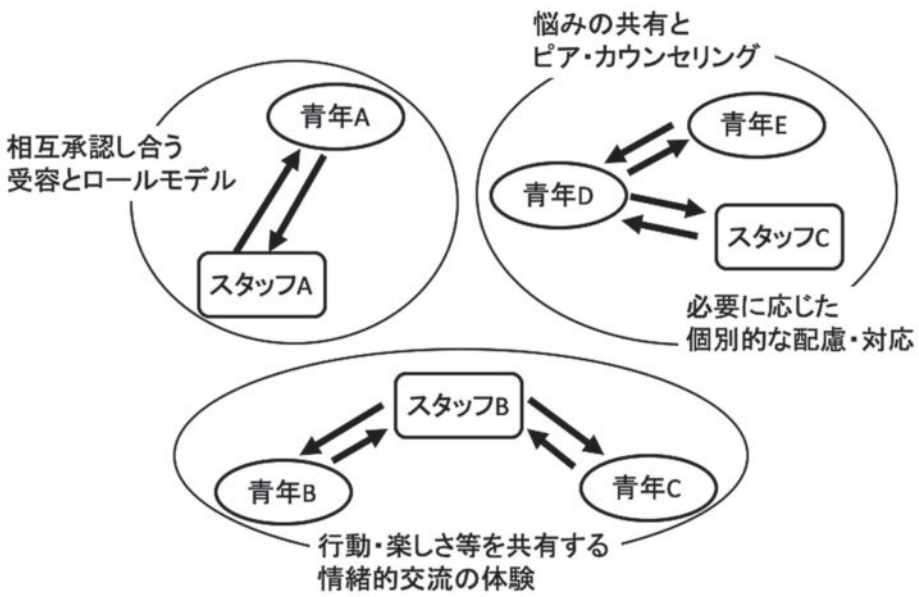

Figure 1.　ごぶサタ倶楽部における居場所機能

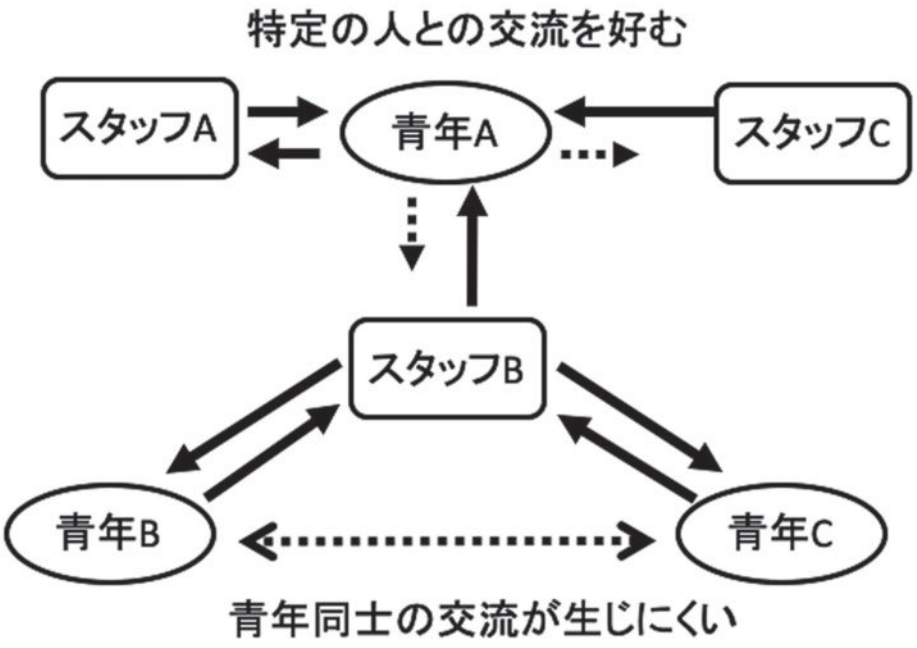

Figure 2. 神経発達症の居場所支援で生じやすい関係性の断片化

告している。日高は､ハブとなる支援者の存在が、青年間の交流を増やし、仲間関係の確認や維持努力、自己開示やピア・カウンセリングの機会を増やすと考察している。ハブを介在し青年同士でピア的に関わる様子から、神経発達症のある青年グループにおいても、青年同士の“ナナメの関係”が生じたと考えることができる。

ここまで概観した通り、親の会が主催する野外での療育活動における子どもの発達的影響は大きいと考えられる。一方、Evidence-Based Practiceの潮流から、野外での療育活動の実践研究は療育プログラムとして、縦の関係による指導の効果検証が中心であり、子ども同士の交流に焦点を当てた研究は少ない。親の会主催の野外での療育活動では、様々な年齢期の子ども・青年が参加することが要因の１つとなり、互いに様々な発達的凸凹を持ち寄ることで能力的な差異が顕在化しにくい可能性がある。本研究では、野外での療育活動における神経発達症のある子どもの異年齢期交流を分析し、異年齢期交流が子どもと青年にどのような影響を与えるか検討を行う。

目　的

本研究は、神経発達症の親の会が主催する野外での療育活動における、異なる年齢、異なる年齢期にある子ども同士、子ども-青年、青年-大人の交流を分析する。そして、異年齢期の交流が能力的な凸凹のある子ども・青年にとってどのような発達的意義があるのかを明らかにする。また特に野外での療育活動に限定することで、日常の教室場面とは異なる環境が神経発達症のある子どもの異年齢期交流に及ぼす影響も検討する。

また本研究では、野外での療育活動を登山やキャンプを行う活動と限定し、登山キャンプと称することとする。なお類似の名称として、臨床動作法をもちいた心理リハビリテーションの一つである心理リハビリテイション療育キャンプ（療育キャンプ）がある。本研究で検討する登山キャンプは、臨床動作法による療育キャンプではないことを付記する。

方　法

調査対象：北海道旭川市を中心に活動する特定非営利活動法人ぷりずむ（以下、ぷりずむ）の活動に参与観察した。ぷりずむは、親の会の機能として旭川 LD 親の会ぷりずむの活動を行っている。旭川 LD 親の会ぷりずむは 2005 年に設立された親の会である。またぷりずむは、学習サークルや野球サークル、登山サークルなどを企画し LD のある子ども・青年の学業面、心理面双方のサポートを行っている。この他にも保護者–学校–心理など関係者を集めた事例検討会や研修会、学校への情報提供などの活動を行っている。ぷりずむの活動に参加する人は、診断の有無にかかわらず LD、ADHD など神経発達症の症状によって困り感をもつ子どもや青年、保護者、ボランティアの大学生や社会人、学校関係者、大学関係者などである。

調査期間：201X 年 8 月～201X＋3 年 8 月（計 3 回）

調査内容：ぷりずむは年に数回、親子登山を企画し、北海道内の様々な山に挑戦している。筆者らと親の会で登山隊をつくり、子どもグループと保護者グループに分かれ登山を行っている。本研究では、親子登山のうち、旭岳登山キャンプを取り上げた。

旭岳登山キャンプの概要:旭岳登山キャンプは、北海道上川郡東川町の旭岳を舞台に、夏休み 3 日間に実施される企画である。参加した子どもは旭岳青少年野営場にキャンプし旭岳登山を行った。ぷりずむの旭岳親子登山の特徴は、旭岳を登頂することに加え、グループでキャンプ活動や一緒に過ごす時間を楽しむことを目的としている点である。また「登山は自分の力で行う」をモットーに体力､天候などを考慮し臨機応変な活動を行った。登山日のあとは休養を兼ねて、1 日自由行動の日が設定される。旭岳青少年野営上の近辺で、子ども主体で鬼ごっこなどの運動遊び、散策、外来種ザリガニ駆除のためのザリガニ釣りなどのアクティビティを行った。旭岳登山キャンプの行程の一例を下に示す（Table 1）。

調査方法と分析方法：筆者らはぷりずむの旭岳登山キャンプに参加し、支援者、登山の指揮（リーダー、サブリーダー）、キャンプ中の話し相手・遊び相手等複数の立場で参与観察した。本研究では、参与観察時に記録したフィールドノーツやビデオ、写真などの情報をもとに、異年齢期交流の特徴的なエピソードを抽出し、質的に検討を行っ

Table 1. 旭岳登山キャンプのスケジュール例（201X＋3 年 8 月の場合）

<table>
<tr><th colspan="3">1 日目</th><th colspan="2">2 日目</th><th colspan="2">3 日目</th></tr>
<tr><td></td><td>先発隊</td><td>後発隊</td><td>7：00</td><td>起床・朝食</td><td>7：00</td><td>起床・朝食</td></tr>
<tr><td>8：00</td><td>旭岳集合</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="3"></td><td rowspan="3">自由行動
・運動遊び
・散策
・休養</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">後片付け
施設掃除
テント撤収</td></tr>
<tr><td>9：00</td><td>登山開始</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>11：00</td><td>解散</td></tr>
<tr><td>12：30</td><td>山頂</td><td>旭岳集合</td><td>12：00</td><td>昼食</td><td colspan="2" rowspan="6"></td></tr>
<tr><td>13：30</td><td>下山開始</td><td>野営準備</td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5">自由行動
・運動遊び
・散策
・ザリガニ釣り
・フェルト工作
・休養　など</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>自由行動</td></tr>
<tr><td>16：00</td><td>下山完了</td><td>合流</td></tr>
<tr><td></td><td>温泉</td><td></td></tr>
<tr><td>18：00</td><td colspan="2">バーベキュー</td><td>18：00</td><td>夕食</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">交流会</td><td>19：00</td><td>ナイト動物園</td></tr>
<tr><td>20：00</td><td colspan="2">入浴・就寝</td><td>20：00</td><td>入浴・就寝</td></tr>
</table>

た。

個人情報の保護：本研究にあたって個人情報の保護を行うため、性別や参加年度、特定可能な発言などを除外する形でまとめた。また同一人物でもエピソード毎にアルファベットを振り直した。

結　果

フィールドノーツなどの記録から神経発達症のある子ども-青年間の異年齢交流について、特徴的なエピソードを４つ抽出した。以下にエピソードの概要と、子ども-青年間の様子を報告する。

【エピソード１】旭岳初体験の子ども A と旭岳経験者の青年 B の登山中の声かけ

登山キャンプでは安全性と体力面のマネジメントの観点から、登山全体を管理・指揮する支援者（リーダー）を先頭に、年少組―青年組―保護者と隊列を組んで登山した。リーダー役は子どもの様子を見ながら、隊列の順番を指名も行った。年少組の子どもは、体力がありモチベーションの高い登山序盤に隊列を抜かそうとしたり、先頭の支援者の直後（２番手）になろうとしたりする。そのため、リーダーが隊列を守るよう年少組に教示する場面が多いが、子どもは自分に体力があるところを見せようとしてしまう。

子どもA：（前の子どもを抜かして、自分が先頭に近いポジションにつこうとする）
青 年 B：「先に行ったら危ないから。」
子どもA：（前に行こうと夢中で青年 B の声かけに気づいていない様子？）
青 年 B：「抜かしたらダメだって。A、列守って！」
子どもA：（ハッと立ち止まり、青年 B を見ながら前の子どもが先に行くのを待つ）
青 年 B：「…おー、いいねぇ！」

リーダーから青年 B に子ども A の面倒をみるよう促したわけではないが、リーダーの年少組への関わりをモデルに、子ども A にルールを教示し、自然にほめる様子が見られた。また同じ２人の間に登山中盤でも特徴的な関わりが見られた。登山中盤では、体力的に厳しくなることと目標である山頂が遠いことから、年少組は不満や諦めをもらしたりすることが多くなる。

子どもA：「（山頂の方を見ながら）えぇー、まだ登るの！」
青 年 B：「ここを越えたらさ、楽になるからさ。」

青年 B から、現在の地点を登り切ると勾配が楽になる意味の発言に対し、子ども A は明確に反応は示していないが、不満はそこで終わり、また登りはじめる。その後、子ども A のおしゃべりが少なくなった事に気づいた青年 B は、リーダーに対して子ども A が体力的に厳しいため休憩を求める声かけをした。青年 B は子どもの表情や登山序盤からの行動を観察しながら、リーダーに子どもの状態を報告したと考えられる。青年 B は旭岳登山における自分の経験にもとづいて子どもにアドバイスをし、子ども A も青年 B のアドバイスを取り入れていく様子が見られた。

【エピソード２】子どもと大人の会話場面に介在する青年 C

入浴の時間になったが、大人との会話に参加し入浴を拒む子どもがいた。大人側が「子どもはもう寝る時間だから」「遅い時間だから」と断固とした姿勢を示す一方、子どもも入浴したくないと断る。その様子を見ていた青年 C は子どもの話を聞きながら互いの落とし所を提案した。

青 年 C：「あー、今は入りたくないんだね。」
「（大人にむかって）〇〇は今風呂に入りたくないんだって。」
「（子どもに向かって）別に入らなく

てもいいんじゃない？　それじゃあさ、朝に入るのはどう？」

青年Ｃは子どもの感情を受容した上で、「入浴し就寝する」という大人の主張で大切な部分は「就寝する」ことであることを読み取り、互いに納得できる案を提供した。その結果、子どもも就寝することに同意し、朝入浴することとなった。子ども―大人間に青年が介在することで互いの主張を調整する役割を担った。また、ある保護者が子どもの訴える学校の教授方法への不満について語っていると、青年Ｃは子どもを代弁するように話し始めた。

青 年 Ｃ：「（学校が教えたとおりに問題を解くよう指示することに不満を抱くことについて）それってさ、分からないまま先に進むからさ。なんでそれで解けるのって。なんでそうなるのって疑問に思ってさ。…だから、教える前に先に自分で考えさせてくれってなるんじゃないの？　自分だったらそう思うな。」

保 護 者：「そうなの？　へー、そんな風に考えるんだ。それならさ…」

青年Ｃは保護者の語りから、子ども側の視点で不満の理由を自分なりに解釈し語った。子どもの語りきれない部分を補うよう代弁する青年によって、保護者は普段、子どもの感じている事を考えている様子が見られた。

【エピソード３】ザリガニ釣りを通して周囲から尊敬を集める青年Ｄ

北海道では外来種のアメリカザリガニやウチダザリガニが流入し、在来種のニホンザリガニを駆逐、生態系を乱すことが知られている。ぷりずむでは、野生動物の保護と管理について生態学的観点から研究しているボランティア大学生の指導のもと、外来種ザリガニの防除体験としてザリガニ釣りを企画している。また人為的に持ち込まれた外来生物の問題を考えるために、防除できた外来種ザリガニはその場で調理している。ボランティア大学生と同じくらいザリガニに詳しい青年Ｄがおり、色、形態、体長などから外来種ザリガニを判定することができる。

子 ど も：「やったー、釣れた！　ねぇねぇ、これは？（青年Ｄのもとに近づく）」

青 年 Ｄ：「（子どもに近づき）これは全体的に黒いから…腹も見てみて（子どもからザリガニを受け取り、腹側を子どもに見せる）…」

上記のようなやりとりを繰り返し、やがて子ども同士でザリガニを判断し始めた。青年Ｄは子どもの様子を見守り、時折バケツの中を確認し在来種のザリガニが混入していないか確認する行動が見られた。また判断が難しいザリガニについて、子ども達が青年の名前を大声で呼ぶと、すぐに子どもの方へ行き判断する等、信頼される様子が見られた。

【エピソード４】ザリガニ料理を振る舞い、大人へ感謝を示す子どもＥ

また子どもＥは外来種ザリガニの調理を行う保護者に、ある支援者のために別枠で調理するよう依頼し夕食時に振る舞った。子どもＥとその支援者は、普段から子どもＥの学習支援などにも参加しており旧知の仲である。

保 護 者：「支援者さんに、Ｅが普段お世話になってるからって言って、ザリガニ料理作っているよ」

支援者は都合上、ザリガニ釣りに参加できなかったため、子どもＥが支援者に振る舞おうとしたと考えられる。保護者の発言を介して、実際に活動に参加できなかった支援者に対して、子どもＥはその日の活動を報告するとともに、ザリガニ

料理を振る舞うことで支援者への日頃の感謝を示したと考えられる。

考　察

はじめに、ぷりずむの登山キャンプ活動におけるエピソードから、神経発達症のある子どもや青年にとっての異年齢期交流について、発達的意義を考察する。

エピソード1では、青年が過去の経験を通じて年少の子どもに登山のルールや知識の提供を行い、子どもも次第に受け入れていく様子が見られた。リーダーである支援者が繰り返し隊列を守るよう教示しても、子どもは「自分はもっと頑張れる」と教示を無視して前に進もうとした。支援者も青年も子どもには同じようなルールや知識を提供しているが、子どもの反応は異なっており、その背景に関係性の違いがあると考えられる。

障害のある子どもの野外の療育活動では、子どもが少し背伸びし大人になって、自分で、出来る振る舞いをしようとする（Dittmann, 1959）。また登山隊を編成しリーダーを設定する性質上、子どもと支援者の関係性は子ども-教師のような評価の伴う縦の関係が生じやすい。縦の関係上では、成功場面でも失敗場面でも子どもは指導者の言葉かけに敏感に反応しやすい（矢澤, 2007）。そのため、登山キャンプという環境では、子どもにリーダーを含めた支援者・保護者など大人に努力する姿を注目されたい、評価されたいという内発的な動機づけが生じやすい可能性がある。子どもの努力する自分を評価されたいという感覚は、精神的な発達年齢期を一時的に進め、思春期前期の大人のルール下から逸脱しようとする正常な発達としての第二の反抗期をもたらすのかもしれない。一方、子ども-支援者の中間に位置する青年は、登山隊内で役職をもたない中立的な立場のため、子どもと青年はナナメの関係性になりやすいと考えられる。ナナメの関係の青年は子どもにとって想像しやすい数年先のモデルである（枝廣, 2013）。従って、青年の言葉かけにある知識や価値、感情は、子どもにとって受け入れやすいと考えられ、野外キャンプにおける子どもの反応の違いを生むと考えられる。またナナメの関係性がキャンプ後も継続するならば、神経発達症のある子どもにとって青年は似た困難、感情を体験しうる存在として、支援者や保護者とは異なった相談機能を有していく可能性が考えられる。

また異年齢期交流は青年の発達を浮き彫りにする機能もあると考えられる。支援者の立場で青年に関わると、青年が登山キャンプを楽しんで参加するために必要な配慮を行ったり、行動プロンプトを与えたりする。支援者としての関わりは、野外での集団生活を成立させるための必要であると同時に、同年齢集団と比較し青年の苦手な部分に着目する行為と言える。しかし、エピソード1にもあるように、年少の子どもがルールを守ったときに青年が賞賛したり、子どもが辛いときに青年が共感したり応援したりする様子が見られる。また大人の代わりに子どもに求められる望ましい行動を提案したり、目標達成のためにプランニングしたりする場面も見られる。従って、支援者-青年の関係では見えにくい、青年の援助される側から援助する側への変容を観察できる機会を通じて、異年齢期交流は同年齢集団では見えにくい発達を可視化すると考えられる。

さらに登山キャンプをはじめ野外での異年齢交流は、陳（2011）の考察する養育性を形成する条件を満たすと考えられる。子ども-リーダーの関わりが青年にとって、「援助を必要とする相手への望ましい姿勢・態度、声がけ、言葉遣い及び援助時の身体的技術についての学習を可能に（陳, 2011）」するモデルであり、登山キャンプという限定された環境が「援助の体験や学習を可能（陳, 2011）」にする環境と言える。神経発達症、特に共感性や援助行動といった社会性の問題を示すASDの青年にとって、利他的な養育性を形成する機会は、方略的なソーシャルスキルトレーニングと同様に、重要であると考えられる。

エピソード2は、児童期（子ども）-青年期（青年）-成人期（保護者）と3つの年齢期に渡っての

交流場面である。このエピソードの中で青年は、児童期–成人期の互いの主張の溝を埋める調整役の役割を果たしている。子どもにとって、ナナメの関係の青年が子どもに被受容感をもたらし、日常生活の規範を受け入れる余地を創り出したように考えられる。

また大人にとって日常生活の規範をどこまで求めるか、という再考をするきっかけになっている。さらに学校生活などで子どもが語る考え方について、子どもの考えをそのまま受け入れ、保護者にとって分かりやすい言葉で整理している。ここで着目したい点は、大人は子どもに規範を求める際に「まだ小さくできないから」、「勘違いしている」、「変なところにこだわっている」等と、無自覚的に子どもを能力的にできない子どもとして扱っている点である。これは、保護者や支援者が子どもを小さな大人として子ども扱いして承認するといったワロンの指摘する「大人の自己中心」（加藤, 2015）的な理解と言える。一方、青年は子どもの感じ方や考え方を“逸脱”と捉えず、そのまま認めている。青年は子どもを異質性のある個人として理解できる可能性がある。青年の子どもの理解が、異年齢期のナナメの関係だからこそ可能なのか、神経発達症という類似の症状をもつ青年だからこそ可能なのかなど結論を出すことは難しい。しかし、子どもをそのまま許容し理解する青年の発言は、異年齢期交流を観察する大人にとって、大人の自己中心性というバイアスを自覚化するという意味で、子どもの理解を再考するトリガーになると考えられる。

エピソード３・４では、ザリガニ釣りを通して周囲から信頼を得たり、集団の活動に貢献したりする様子が観察されている。木谷（2001）は、障害のある子どものキャンプ活動について、療育者側が考えるキャンプの楽しさに ASD のある子どもを当てはめようする危険性を指摘する。その上で、写真好きの ASD のある青年に記録係を任せてユニークな視点の作品を完成させたエピソードから、木谷は支援者の設定した参加の仕方だけでなく、その子どもなりの参加の仕方や会への貢献をする体験を用意することが、ASD のある子どもの自発性や他者への情緒的交流につながる可能性を考察している。木谷の考察どおり、ぷりずむの登山キャンプでも同様に、ザリガニの同定やザリガニ料理の振る舞いなど集団への貢献が、子どもや青年にある種の満足感を生じさせていると考えられる。

以上のことから、ぷりずむの登山キャンプにおいて、神経発達症のある子ども–青年–支援者の三者関係に生じた関係性をまとめると以下のようなると考えられる（Figure 3）。スタッフは支援者としての役割上、子どもに対して指導的要素を残した縦の関係性になりやすく、指導的要素が少なくなる青年に対してはより中立的な斜めの関係性に近づく。子ども–青年間では、長所を持ち寄り、相互に受容的・養育的な関係が形成されると考えられる。その関係の中での営みが互いの役割を生み、結果的に集団への参加、貢献する機能をもつと考えられる。清水（2016）は集団の場を多様な主体性を消す同調の場と互恵性の中で多様性を活かす共存在の場と定義し、共存在の場では、自分が相手や居場所に自分の時間、能力、感情などの要素を提供する与贈という行為の循環が生じるとする。清水の理論によれば、ぷりずむの登山キャンプの中で子どもや青年の間に見られた活動は、異年齢期交流という場所に対して、互いに他者に何かを与贈し合うことで共存的な居場所を作り出したとも考えることができる。本研究で残す課題として、神経発達症のある子ども–青年間のナナメの関係性が生じる条件の精査がある。枝廣（2013）は、児童館やアルバイト先など学校から離れた活動や空間の共通項をもつ高校生間でナナメの関係性を見出している。本研究で取り上げたぷりずむの登山キャンプは、枝廣同様に学校から離れた活動や空間の中で見出されている。しかし、登山キャンプでの異年齢期交流であっても、自分と明確に差異がある他者は近未来の自己像として重ねにくいと考えられる。従って、神経発達症のある子ども–青年間のナナメの関係性は、神経発達症や学校生活での困難さ、限定された興味関心

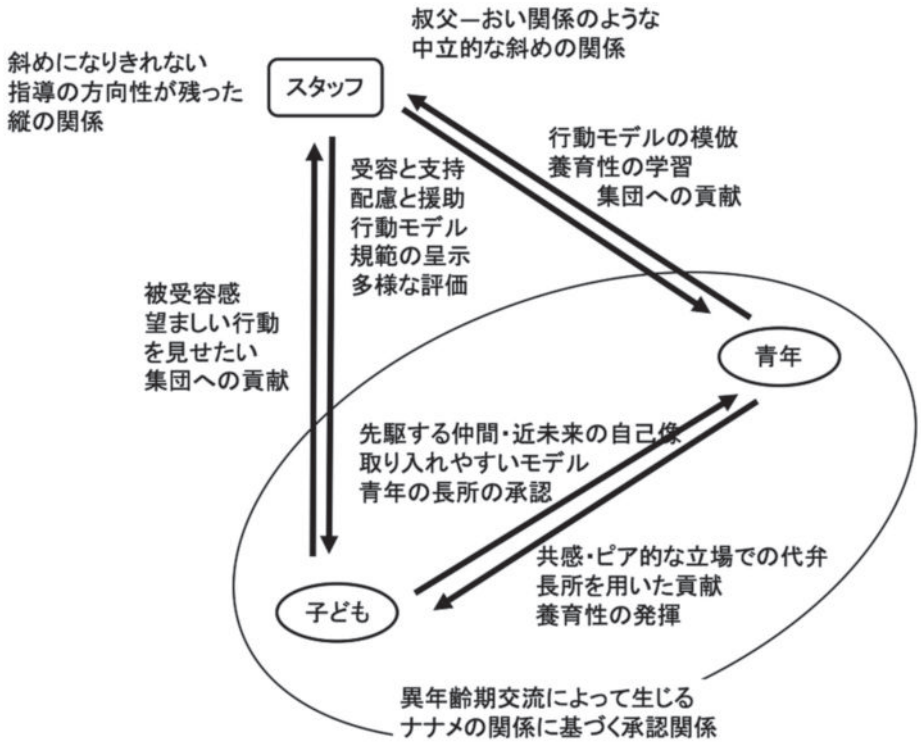

Figure 3. ぷりずむ登山キャンプにおける異年齢交流によって生じる関係性

の重なりなど臨床的な要素を必要とするか検討する必要がある。

次に、登山キャンプという特殊な環境が異年齢期交流に与えている影響を検討したい。室橋(2015)は、石器作り体験で指導員から賞賛された青年のエピソードから、太古であればその青年が優秀な石器の作り手として信頼されただろうと述べる。そして室橋は、学校適応のできる子どもが「良い子」とされる現代社会では、神経発達症のある子どもの長所は評価されにくく、非日常的な行為の中に見い出される事があると考察している。登山やキャンプ、ザリガニ釣りで貢献できる才能があることは、学校や社会で生活する上で評価されにくい。しかし、学校や社会での個人が、その個人を規定する一側面であると考えるならば、その個人の総体として、学校で上手く適応する能力と同様に、野外で上手く適応する能力は等しく評価されると考えられる。つまり、子どもの世界において大きな比重を持つ学校での評価基準が一元化していることが、子どもの自尊心を損なう機構になっていると言える。

近年、多重知能理論(Gardner, 1999、松村訳2001)に基づき、様々な領域(対人的知能、論理数学的知能、音楽的知能、空間的知能、内省的知能、言語的知能、身体運動的知能、博物学的知能、霊的知能、実存的知能)の特性から子どもを評価し、学習方法を検討する試みが行われている(涌井, 2013)。多重知能理論によれば、野外活動で適応的な子どもは博物学知能や身体運動的知能の領域に長所があることになる。多重知能理論のように評価軸を多元化する試みは、能力不足という個人の視点から、長所と環境が要求する条件のマッチングという視点を提供すると考えられる。同様に、野外での療育活動は、学校生活で見出されにくい長所をもった子どもに新しい評価軸を提供し、彼らの自己否定的な感情を予防する可能性がある。

また本研究で紹介したエピソードから推察され

るように、登山キャンプにおける異年齢期交流は、集団精神療法に通底する内容を含むと考えられる。特に Yalom & Vinogradow（1989，川室訳，1997）が考える集団精神療法の療法的因子が観察された。

エピソード１・２のように、親の会という構造上、登山キャンプを通じた異年齢期交流は、年少の子ども達に少し未来の青年の“困り感はあるが、それなりに上手く”やれている様子を観察させる。それは他者の成熟を観察することで自分の成長への大きな期待をもつこと、グループが希望をもたらすという事である。次に、同じ問題をもつ子どもや青年と出会うことで、自分の問題は他の人にも生じている問題だと普遍化される。問題が普遍化されることで安心感がもたらされると考えられる。またエピソード３・４が示すように、登山キャンプを行う仲間に対し何か提供をする、役立つという愛他的な経験は自尊心を保護すると考えられる。

さらに旭岳登山のような心理的・身体的に負担の高いアクティビティに対し、未経験の子どもや青年が途中で「来るんじゃなかった…もう無理だ」と不満をもらす一方、登頂に成功したとたん笑顔になり、「次はいつ登るんですか」と質問することがある。これは苦難を乗り越え登頂したという強烈な体験によって強い感情体験を伴うカタルシス（感情の喚起）が生じていると考えられる。この他にも、キャンプのなかで入浴、整理、調理などを一緒に練習することで日常の社会適応的な技術を発展させる機会も含んでいる。このようにいくつもの療法的因子をもつ登山キャンプは、最終的に集団としての凝集性を高めていると考えられる。

Yalom は、凝集性の高さが、他者を受容し理解する状態を提供し、自己理解や自己開示、問題への対決といった積極的態度を促すとする。従って、登山キャンプは集団精神療法を意図して行われてはいないが、Yalom の理論をもとにすると、個々の関係性のみならず、登山キャンプというグループ構造が、神経発達症のある子どもや青年にとって心理的安定と健康的な発達をもたらす居場所になりうる可能性をもつと言える。また北山（2003）は「本当の自分」として「いる」ために「遊ぶこと」を必要とすると指摘し、ごく私的な仲間と遊ぶときに無意識の中で「本当の自分が居る」ことになると考察している。従って、親の会による登山キャンプは、同じ問題を持つ仲間と登山という遊びの対象と遊び場所の双方が用意され、学校や家庭と言った日常生活とは異なる自分の状態を出すことができるのかもしれない。

展　望

最後に神経発達症のある子ども・青年にとっての異年齢期交流や居場所に関する研究が、学校というシステムに寄与できる方向性について論じる。

室橋（2016a，b）は、神経発達症の発達特性をいずれも機能の欠如ではなく“社会”の求める基準・規範にそぐなわない特性を有すると考えた上で、障害のある子どもを少数派、健常の子どもを多数派と捉えた際、同年齢集団の多数派の規範では、少数派である神経発達症のある子どもの発達が許容されにくいと指摘する。つまり、同年齢集団の中では健常の青年がより正確に、早く、効率的に行動するため、神経発達症特性ゆえの“できない”部分が顕在化しやすいと言える。しかし、異年齢の集団では互いに“できることが違う”ことが前提であり、求められる規範が異年齢集団では異なるため、その個々人の発達の差異が許容されうると考えられる。

また室橋は、発達という概念を、生物学的基盤と社会的環境の相互作用によって認知表現型の多様性、個々人の学びが可視化される過程と捉え直している。その上で、神経発達症のある子どもの学びを支える実践として、多様性を認め、表現型と学びを深化させるシステムが必要であり、相互的に承認されるシステムが必要であると述べる。これは仲間の認知的多様性を相互承認する居場所の機能を教育システムの中に取り入れることのよ

うに考えられ、新しい学校のあり方の１つ（例えば、リヒテルズ・苫野，2016 を参照）として議論されている。

現在の日本の学校では、受験戦争に代表されるように教育内容を伝達する教育主体が根幹であり、学び方や学ぶ内容など学習者の選択よりも、こうあるべきという社会的コンセンサスへの同一化を強制する（鈴木，2008）側面が強い。もし同一化が過剰になれば、学校は、個人を規格化する教育を行い、規格外を不良品として排除する均質化装置としての学校（桜井，1984）に至る可能性がある。均質化を前提とした学校システムでは、障害をはじめ、人種、文化、貧困など、多様な表現型を相互に承認される場から遠ざかると考えられる。

本研究で取り上げた登山キャンプでも、子どもや青年の価値観や主張を受け入れ、その個人が集団に参加しやすい形式に流動的に対応している様子が見られる。そのため、野外での療育活動は、学校集団と同様にある程度の同一化を行いながらも、許容できる幅を広げ多様性を認め合う営みをしていると考えることができる。インクルーシブ化が進み、障害など多様な背景の差異が前提となる学校システムにおいて、学校内外にある多様性を認め相互に承認し合う居場所の実践例を検討し取り入れる必要があると考えられる。これからの異年齢期交流や居場所に関する研究では、相互承認し合う価値観を共有するメカニズムを明らかにし、学級・学校集団で実現化する方法を明らかにしていくことが求められる。

付　記

本研究は、作新学院大学研究倫理審査委員会に研究計画を提出し、審査を受けて承認を得た（承認番号＃201702）。また本研究の推進、本論文の執筆にあたって、個人情報保護に十分に配慮し行い、特定非営利活動法人ぷりずむの許可を得た。また本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業科学研究費補助金基盤研究（B）（課題番号15H03105、研究代表者：川田学）の助成を受けて行った。

謝　辞

本研究は特定非営利活動法人ぷりずむ（旧旭川 LD 親の会ぷりずむ）に参加する子ども達と保護者と一緒に活動する中で行うことができました。また北海道教育大学旭川校の片桐正敏准教授に協力していただいて、親子登山企画を無事に行うことが出来ました。この場を借りて関係者の方に感謝いたします。

引用文献

American Psychiatric Association.（2014）. *DSM-5　精神疾患の診断・統計マニュアル.*（高橋三郎・大野裕・染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉，訳）. 東京：医学書院.

Bamba, S., & Haight, W. L. (2007). Helping maltreated children to find their Ibasho: Japanese perspectives on supporting the well-being of children in state care. *Children and Youth Services Review*, *29*(4), 405–427.

陳省仁.（2011）. 養育性と教育. *北海道大学大学院教育学研究院紀要*, *113*, 1–12.

Dittmann, L., L.（1959）. *ちえ遅れの子の家庭教育.*（奥田三郎・木村謙二，訳）. 東京：日本文化科学社.

枝廣和憲.（2013）. 子どもの居場所の多様性とその中核について：５つの居場所とナナメの関係. *日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集*, S102–S103.

枝廣和憲.（2015）. 中高生年代の能動的居場所のエスノグラフィ：ナナメの関係に着目して. *人間・環境学会第 22 回大会発表論文要旨*, 28.

Gardner, H.（2001）. *MI：個性を生かす多重知能の理論.*（松村暢隆，訳）. 新曜社.

半田有子.（2017）. 神経発達症のある子どもの子育てに関連した困難と適応―養育レジリエンスと育児における自己効力感の観点から―. *作新学院大学大学院心理学研究科 2016 年度修士論文.*

日高茂暢.（2013）. 子どもの居場所の多様性とその中核について：「発達障害のある青年の居場所をめざして」. *日本教育心理学会総会発表論文集*, *55*, S102–S103.

日高茂暢.（2012）. 居場所から準拠集団へ：青年をつなぐハブ・スタッフ―青年の思いを翻訳し，青年の関心を接着剤にする―. *日本教育心理学会総会発表論文集*, *54*,

890–891.

笠原嘉.（1977）. *青年期　精神病理学から*. 中央公論社.

加藤義信.（2015）. *アンリ・ワロンその生涯と発達思想―21 世紀のいま「発達のグランドセオリー」を再考する*. 福村出版.

北山修.（2003）. 第 1 章　自分の居場所―精神分析的理論と臨床―. *子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在*.（住田正樹・南博文，編）. 21–38. 九州大学出版会.

木谷秀勝.（2001）. 自閉症児・者への治療教育とサポートシステムに関する一考察：「わかすぎ自閉症キャンプの実践から」. *教育実践総合センター研究紀要, 12*, 19–28.

木谷秀勝.（2014）. 子どもの発達と知的評価：自己理解を巡って：「自己理解」研修合宿の実践から. *Asp heart：広汎性発達障害の明日のために, 12*(3), 90–97.

木立明甫，長根昌代，大川佳代子，関川悠子，今莉奈，& 松田侑子.（2015）. 大学生における自閉傾向と精神的健康の関連：居場所の心理機能を考慮して. *弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要,* (11), 16–27.

小泉雅彦・日高茂暢・富永大悟・室橋春光.（2013）. ごぶサタ倶楽部における発達障害青年の支援―支援集団として求められる関係性と準拠集団の生成―. *日本 LD 学会第 22 回大会発表論文集*, 500–501.

小林隆児・村田豊久.（1977）. 自閉症児療育キャンプの効果に関する一考察. *児童青年精神医学, 18*(4), 221–234.

望月直人.（2011）. 自閉スペクトラム障害の不安のコントロールプログラム　自己の感情理解から不安への対処につなげる：日間賀島合宿での実践より. *Asp heart：広汎性発達障害の明日のために, 10*(2), 36–43.

室橋春光.（2015）. ぷりずむサマーキャンプ 2015 を振り返って. 特定非営利活動法人ぷりずむ会報.

室橋春光.（2016a）.「学習障害」概念の再検討. *北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124*, 13-31.

室橋春光.（2016b）. 土曜教室活動の意義. *北海道大学大学院教育学研究院紀要, 124*, 93-105.

リヒテルズ直子・苫野一徳.（2016）. *公教育をイチから考えよう*. 日本評論社.

桜井哲夫.（1984）. *「近代」の意味*. NHK ブックス.

柴田秀幸・内海淳・若狭智子・澤井ちはや・牧野真悟.（2011）. 青年期・成人期における発達障害者の「居場所」支援に関する検討. *秋田大学教育文化学部研究紀要　教育科学, 66*, 19–24.

清水博.（2016）. *〈いのち〉の自己組織　共に生きていく原理に向かって*. 東京大学出版会.

白石雅一.（2010）. 心の絆が生まれるとき―自閉症児と関係を創る（その 26）テンションのコントロールと日間賀島合宿. *アスペハート, 9*(2), 52–67.

鈴木敏正.（2008）. *現代教育計画論への道程―城戸構想から「新しい教育学」へ―*. 大月書店.

通山久仁子.（2011）. 発達障害のある子どもをもつ親をめぐる動向―その論点の整理のために―. *西南女学院大学紀要, 15*, 55–65.

田中哲.（2013）. *発達障害とその子「らしさ」―児童精神科医が出会った子どもたち*. いのちのことば社フォレストブックス.

涌井恵.（2013）.「学び方を学ぶ」テキスト（試作版）学びの達人（ふろしき忍者）になれるコツ. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所.

渡辺隼人・蒔苗詩歌・室橋春光.（2017）. 発達障害を持つメンバーとの長期にわたる関わり：心理的居場所としての「ごぶサタ倶楽部」. *子ども発達臨床研究, 9*, 41–45.

山下功.（1966）. 精神薄弱児療育キャンプの効果について. *熊本大学教育学部紀要. 第二分冊, 人文科学, 14*, 108–116.

Yalom, I. D. & Vinogradov, S.（1997）. *新装版グループサイコセラピー―ヤーロムの集団精神療法の手引き*.（川室優，訳）. 東京：金剛出版.

矢澤久史.（2007）. 指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響. 東海学院大学紀要, *1*, 211–217.

米内山康嵩.（2012）. 居場所から準拠集団へ：事例から考える，発達障害青年と関わる際に BBS 的な立場や関わりがもつ可能性とは？. *日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集*, 890–891.

Abstract

Practical research on intervention for children with handicapped focuses mainly on acquiring specific skills and few studies focusing on the relationship between children and adolescents. The purpose of this study is to clarify the influence of cross-age communication between children and adolescents with neurodevelopment disorders. In this research, we participated in the climbing camp planned by LD parent's association and observed and investigated participants' cross-age communication occurring in the camp. In climbing camps, it was found that the relationship between children and adolescents are more neutral and supportive. As a result, adolescents seemed to be a role model to be adopted as a near future image for children, and for adolescents to be a place of imitating the behavior of supporters and practicing the childcare. In addition, the climbing camps have the elements that encourage psychological stabilization like group psychotherapy as a place of acceptance and security (*ibasho*). For children and adolescents with neurodevelopmental disorders, compared to the same age group, different age group seemed to be more likely to accept the difference in ability positively.

Key words : Neurodevelopmental Disorders, LD parent's association, cross-age communication, ibasho (one's psychological place where a person feels acceptance and security), Naname relationship (diagonal relationship between children-adolescent which are neutral and supportive)